

Korea File 2018 NO.3 別冊「朝鮮の声」(2018/08/01~11/04)

●ASEAN 地域フォーラムにおける李容浩朝鮮外相の演説文(8/6)

議長先生。私はまず、ASEAN 地域フォーラム外相会議を主催し、参加者を親切に歓待してくれている、シンガポール共和国政府に謝意を表します。

また、6月に成功裏に行われた朝米首脳の対面と会談のために素晴らしい条件と便宜を提供してくれたシンガポール政府の誠意ある協力に、再度、謝意を表します。

ここシンガポールで朝米関係史上初めて行われた首脳対面と会談はアジア太平洋地域の情勢の発展に最も深遠で肯定的な影響を及ぼした重大な出来事でした。

長い間、敵対関係にあった国家間でもお互いに信頼を醸成すれば、対話と交渉で地域と世界の平和と安全保障問題を解決していけるということを示したことに、シンガポールの首脳会談が持つ巨大な国際的意義があります。

アジア太平洋地域は、その地政学的位置と日々増大する巨大な成長の機会に、戦略的重要性が拡大し続け、世界的な介入が増えており、それにより多くの複雑な問題点も新たに生まれている地域です。

この地域で大国の利益が互いに衝突する問題が発生し悪化しており、その過程で、地域の国々の団結と協力関係、情勢安定に不利な影響を与える要素が現れています。発展と繁栄の必須条件である地域の平和と安全を危険にさらす事態が頻繁になっています。

このような時こそ地域の国々は、地域問題の解決の主人、当事者としての自主的立場をさらに確固に堅持して団結と協力を強化していくべきでしょう。

私は、朝鮮民主主義人民共和国が「東南アジア親善および協助条約」に加入してから10周年になる意義深い年に、朝鮮半島情勢で画期的な転換を遂げ、地域全体の平和と安全に意義深い寄与をすることができるようになったことを特に嬉しく思います。

私はこの機会に、朝鮮民主主義人民共和国・国務委員会委員長である金正恩同志の大胆な決断と平和守護の意志、精力的な実践活動により、朝米関係の新しい歴史のページが開かれ、朝鮮半島と北東アジア情勢に根本的に新しい肯定的な気流が形成されたことを心から支持歓迎してくれた地域の国々に、深い謝意を表します。

自主権尊重、平等、互恵の原則で、地域のすべての国と友好協力関係を積極的に発展させ、ASEAN 地域フォーラムの信頼醸成と予防外交実現のための共同努力に、引き続き貢献しようとするわれわれの立場に変わりはありません。

議長先生。朝鮮半島に形成された平和と安定の新しい気流は、アジア太平洋地域の全般情勢の安定的で建設的な発展のために、地域のすべての国が共同努力で積極的な関心を持ち大事にし、強固にしていかなければならない貴重な芽です。

朝鮮半島に強固な平和を構築するための道のりは、今、歴史的な一步を踏み出したに過ぎません。

過去の不信と敵対の長い歴史を見る時、信頼を醸成し、朝鮮半島に平和を確固なとして定着させる過程は、時間と手間がかかる長い道りにならざるをえません。

現在の朝鮮半島情勢は一言で言って、古いものを打破し新しいものが誕生する歴史の瞬間だと言えます。

科学の世界と同じように政治の世界でも、新しいものの誕生は古いものとの闘いを伴わざるをえません。

去る6月、ここシンガポールのセントーサ島で朝米首脳は、失敗を重ねてきた過去の方式から大胆に抜け出し、まったく新しい方法で新しい歴史を記していくことについて世紀的な合意を成し遂げました。

その結果、第1に新しい朝米関係の樹立、第2に朝鮮半島における恒久的で強固な平和体制の構築、第3に朝鮮半島の完全な非核化、第4に米軍遺骨発掘及び送還を内容とする歴史的な朝米共同声明が採択・発表されました。

朝米共同声明を、責任感をもって誠実に履行していこうとする朝鮮民主主義人民共和国の決心と立場は確固不動です。

朝米共同声明の完全な履行を担保する根本的な鍵は信頼醸成です。

信頼は一朝一夕に積み上げられる感情ではなく、朝米間の十分な信頼醸成のためには、必ず双方の同時的な行動が必要不可欠であり、できることから一つずつ順次的に行っていく段階的な方式が必要です。

もし米国が、共同声明の第3と第4条項のみを先に履行することを主張し、われわれが第1と第2条項だけを先に履行することを主張するならば、信頼は醸成されにくくなり、共同声明の履行そのものが難関にぶつかるでしょう。

信頼醸成を先行させ、共同声明のすべての条項を均衡的に、同時に、段階的に履行していく新たな方法だけが、成功できる唯一の現実的な方途であるとわれわれは信じています。

米国が、われわれをして心おきなく近寄ることができるようにしてくれる時、われわれもまた、米国に心を開きそれを行動で示せることができるようになります。これが、朝米両国首脳が成し遂げた合意精神の根本的核心です。

憂慮すべきは、米国内で首脳部の意図とは異なり、古いものに戻ろうとする試みが、執拗に表出され続けていることです。

朝鮮半島の非核化のために、核実験とロケット発射実験の中止、核実験場廃棄など、われわれが積極的に先にとった善意の措置に対し呼応するどころか、米国ではむしろ、わが国に対する制裁を維持すべきとの声がさらに高まっており、朝鮮半島の平和保障の初歩の初歩的措置である終戦宣言問題からも後退する姿勢を見せています。

ましてや、今年9月に迎える朝鮮民主主義人民共和国創建70周年の慶祝行事に、他の国々が高位級代表団を送らないよう圧力をかけるような、極めて穏当でない動きまで現れています。

焦りは決して信頼醸成の助けにはならず、特に一方的な要求にだけにしがみつ়くのは、信頼ではなく逆に不信だけを甦らせることになります。

朝米共同声明が、米国の国内政治の犠牲物にされ朝米両首脳の意図とは異なる逆風が生じることを許してはなりません。

われわれはすでに、米国が建設的な方案を持って来るならば、それに相応する何かをする考えもしていたが、米国が、われわれの懸念を払しょくする確固たる用意を行動で示さない限り、われわれだけが一方的に先に動くことは絶対にないでしょう。

朝鮮のことわざに「ゆっくりでも牛の歩み」という諺がありますが、朝鮮半島の非核化を実現するためには、一つ一つの段階的な同時行動を通じ、信頼を着実に積み上げていくことが最も速く確実な近道です。

ASEANが地域協働機構として発足して以来、今日のように親善と協働の雰囲気溢れる機構に、国際的な尊敬と信頼を受ける機構に発展するために50年以上の歳月がかかったし、地域の平和と安全に対する国際的協調のために、朝鮮民主主義人民共和国がASEAN地域フォーラムに加入して以来、今日のような朝鮮半島情勢の画期的な転換を目撃することになるまで、18年という期間がかかったという歴史的事実を想起してみるべきでしょう。

議長先生。朝鮮民主主義人民共和国は4月、経済建設に総力を集中させる新たな戦略的路線を選択しました。

わが国で経済が興隆し人民の生活が高まれば、地域全体の平和と安全、経済成長のために良いことはあっても、決して悪いことはないでしょう。

その実現のため、われわれはこれまで以上に朝鮮半島とその周辺の平和的環境を必要としています。

国際社会は、当然、われわれが非核化のために取った善意の先行措置に対し、朝鮮半島の平和保障と経済発展を鼓舞し促す建設的な措置で応えるべきでしょう。

私はこの場を借りて、会議に参加した ASEAN 地域フォーラムのすべての加盟国が、苦勞の末にもたらされた朝鮮半島情勢轉換の世紀的機會を大切にして、朝鮮半島問題の根源的解決に役立つことをするという期待と確信を表明するものです。ありがとうございます。

●労働新聞論評：片山さつき議員の差別発言を糾弾「卑劣な差別行為を正当化するな」

日本の自民党所属の参議院議員・片山さつきなる者が最近「産経新聞」系列のある夕刊専門紙を通じて、朝鮮総聯の民族教育に対する安倍政権の悪らつな差別措置を正当化する妄言を並べ立て全同胞のこみ上げる激しい怒りを誘っている。

彼女は、朝鮮学校を高等学校支援対象から除外し、祖国訪問を終えて帰ってきた在日朝鮮人学生たちの記念品を奪った日本当局の不当な措置が、国連人種差別撤廃委員会に提起されたことを巡って、難癖を付けながら、朝鮮学校が支援を受けるなら「北朝鮮との不当な関係を終わらせた証拠が必要」だの、記念品の没収は「粛々と法を執行しているだけで差別ではない」と大口を叩いた。

そのうえで、自らの卑劣な差別措置と人権侵害行為が国連人種差別撤廃委員会にて審議されることに関する対応策として、「国連分担金の再検討も考慮」する必要があると騒ぎ立て、金さえあれば化け物も飼うことができるというようなエコノミック・アニマルらしい皮算用も露わにした。

日本の与党である自民党政務調査会長代理職を兼ねているという片山の今回の妄言は、決して一個人の見解を反映したものではない。それは朝鮮総聯の民族教育をどうにかして抹殺しようとする日本反動たちの根深く腹黒い下心をそのまま表している。

安倍一味が、日本にある外国人学校の中で唯一、朝鮮学校だけを高等学校支援制度適用の対象から除外していることは、何によっても正当化できない。それは明白に、日本特有の民族排外主義と執拗な反共和国、反朝鮮総聯・敵視政策の集中的な発露であり、わが同胞たちの民族教育の権利を奪い、在日同胞社会の未来を踏みじめる不法無法のファッショ的暴挙である。

在日朝鮮人子女たちは、日本帝国主義の植民地統治時代に強制的に連れてこられた人々の子孫であり、彼らが自国の歴史と文化に対する教育を受けることは当然のことである。また、彼らの勉強する学校が、日本の学校と同等な権利を持つということは論ずる余地もない。

にもかかわらず、日本の反動たちは朝鮮学校が思想や運営面で共和国の影響を受けているので支援対象にはならないという、とんでもない詭弁を弄している。ひいては、朝鮮学校を通じて共和国へ送金された事実もあるなどというねつ造説まで流布している。朝鮮学校がこのようなとんでもない論拠により高等学校支援制度適用の対象から除外されるということは、日本反動たちの反共和国、反朝鮮総聯狂症がどの境地にまで至ったかということをはっきりと示している。

片山が去る 6 月、神戸朝鮮高級学校の生徒たちの荷物をむやみに引っ掻き回し土産品まで押収した自らの非人道的な蛮行を「差別ではない」と庇護したことも容認できない。

日本の反動たちが祖国訪問を終えて帰ってくる学生たちの土産品まで強奪したことは、今も国際社会の驚愕を誘っている。このような天下のならず者のようは仕打ちを、誰その「核とミサイル実験に対する対応措置」に変える姿は、「おしろいが七難を隠す」という自分たちのことわざを政治にそのまま適用させるものである。

世界の耳目を集める朝鮮半島情勢の流れを妨げようと、怏々不楽でありとあらゆることをしてきたが「東奔西走で靴だけ傷める」格好になった日本反動らは、それこそ朝鮮総聯と在日同胞を相手に汚らわしい腹いせをしている。島国日本の汚く、体質化された悪習は変わることはない。

在日朝鮮人に対する差別政策と人権侵害を合理化しようとする日本反動らの策動は、初歩的な人倫道徳も国際法的な要求も眼中になく、言いがかりをつけてくる政治小人の思考方式

から出たものであり、日増しに高まる国際社会の糾弾世論にあわてふためく者たちの哀れな身もだえにすぎない。

日本の反動は、絶え間なく敢行されている朝鮮学校差別策動と人権蹂躪犯罪行為に対するわが人民の憤怒が天空こみ上がっているということをしっかりと知り深思熟慮するほうが良いであろう。

日本のことわざに「将来を考えない者は不幸な日を免れられない」という言葉がある。もう一度警告するが、われわれは朝鮮総聯と在日同胞子女たちを迫害する日本反動らのファシヨ的暴挙と反人倫的妄動を見過ごさず、必ず数千数百倍で決算するであろう。

●朝鮮中央通信社論評：「小細工を弄するな」（8/6）

「日本にとって最優先の法律的・道徳的義務は侵略犯罪に対する反省・謝罪・賠償である」

日本がまたもや、無分別に振舞っている。

先日、河野外相と参議院議長なる者がいわゆる非核化と「拉致問題」について、でたらめに語った。

これに先立った安倍首相の「費用分担」、「首脳会談実現」などという欺瞞と一脈相通ずる今回の妄言は、朝鮮半島問題になんとしても介入しようとする日本の不安な内心を表している。だからといって、どん底に落ちた日本の境遇が変わるだろうか。

周知のように、いま日本は朝鮮半島と地域の平和と安全保障のための対話と協力プロセスに唯一名刺も出せない恥をかいている。日が経つにつれ対話の雰囲気にも水を差し混乱だけをつくる日本なので、日本に対する国際社会の視線もまた日々厳しくなっている。

一言で、日本は行く先々でのけ者にされ、冷遇を受ける史上最悪の困惑した状況に陥っている。これに極度にあわてふためくあまり、さまざまな妄言で人々の注意を引いてみようとしているのである。

島国が瀕した哀れな境遇は全て、時代錯誤の対朝鮮圧力一辺倒政策が招いたものである。

大勢から離れて旧態依然の対朝鮮敵視基調をそのまま維持しておいて、どうして、われわれと対座することができ、日々ひどくなる「疎外」現象から脱することができようか。

にもかかわらず、日本はすでに解決済みの「拉致問題」を執拗に持ち出し、反朝鮮敵対機運を鼓吹することにより、みずからの運命をさらに抜き差しならぬ窮地へ追い込んでいる。

他者がみな飛び降りる対決の船に独り残って朝鮮半島の緊張激化、情勢悪化の櫓を熱心に漕いでいく島国の有様は実に笑止千万である。外信までが「日本は朝鮮半島問題の討議で確かに2部類の国家へと追出された」と嘲笑するに至っている。

こんにち、日本がわが国家になすべき最優先の法律的・道徳的義務は、過去の血なまぐさい侵略犯罪に対する誠実な反省と痛切な謝罪、徹底的な賠償である。

日本がいくら大勢の流れに加わろうと術策を弄しても、罪悪で満ちる過去をきれいに一掃するまでは、現在の哀れな境遇から絶対に脱することができない。

●朝鮮中央通信社論評：「大勢を知らない無分別なたわ言」（9/15）

日本外相の終戦宣言「時期尚早」発言を非難

去る14日、日本の河野（太郎）外相が9月に開かれる北南首脳会談について取り上げ、北朝鮮が求める終戦宣言は時期尚早だの、いわゆる「具体的な行動が取られた後に終戦宣言というのがあるべき姿である」だの何のと力説した。

結論から言うと、日本外相のつまらないラッパは周辺の構図から完全に端に押し出された自分らの哀れな境遇を覆い隠し、対決雰囲気での鼓吹で地域問題に首を突っ込もうとする意地悪な性根をそのままさらけ出している。

対話と平和はこんにち、誰も否定することも、逆らうこともできない大勢となっている。

そこで、朝鮮半島で武力衝突の危険と戦争の恐怖を完全に取除き、この地を完全な平和の場にしようというわれわれの確固たる立場と意志は今、人々の積極的な支持と共感を呼んでいる。

朝鮮半島で強固な平和を遂げる道は、物理的な戦争状態に終止符を打つ問題と直結しており、これを前提とする。

朝鮮半島に平和が宿るようにしようと確約しながらも、現在まで銃口を突き付けて不信と敵対関係を持続させているのは極めて不正常的な事態であって、世界の平和と安定にも大きな影響を及ぼしている。

先の朝鮮戦争が停戦状態に入ってからいつしか65年の歳月が流れ、終戦宣言はもはや先送りできない時代の課題になっている。

今、朝鮮人民はもちろん、世界の人民皆が朝鮮半島で終戦宣言が一日も早く発表されることを待ちわびているのはまさに、このためである。

このような希望は、来る北南首脳会談と共に一層強烈なものになっている。

このような時に、終戦宣言が時期尚早だの何のと言った日本外相なる者の無分別なたわ言は、周辺にのけ者にされて独りぼっちになった者の断末魔の悲鳴にすぎない。

終戦宣言の締結に対する国際世論がますます急増している時に、他の誰でもなく一国の対外政策に責任を持つという外相が目の前の現実も、大勢の流れも正しく見られず、独り善がりなことを言う姿こそ、政治小者としての日本の振る舞いをそのまま見せたものである。

日本は、「言いたいことは明日言え」という自国の格言を思い出すのも良いであろう。

狭い視野と頻繁な無駄口は、自分らの立場をさらに苦しくしていることを知るべきである。大河の流れでうるさいのは、水面の泡だけである。

日本が引き続きひねくれたことを言って悪態をついては、国際的な恥ばかりかき、周辺関係の構図からはもちろん、国際関係の構図からも完全に押し出されることになることを銘記すべきである。

われわれは、過去の罪悪にまた他の罪悪を積み重ねている日本の態度を厳正な視線で見えており、いつまでもしっかり計算するであろう。

● 9月平壤共同宣言 (9/19)

朝鮮民主主義人民共和国国務委員会の金正恩委員長と大韓民国の文在寅大統領は、2018年9月18日から20日まで平壤で北南首脳会談を行った。

両首脳は歴史的な板門店宣言後、北南当局間の緊密な対話と協議、多面的な民間交流と協力が行われ、軍事的緊張緩和のための画期的な措置が取られるなど、立派な成果が収められたと評価した。

両首脳は、民族自主と民族自決の原則を再確認し、北南関係を民族の和解と協力、確固たる平和と共同繁栄のために一貫して持続的に発展させていくことにしたし、現在の北南関係の発展を統一につなげていくことを願う全同胞の志向と念願を政策的に実現するために努力していくことにした。

両首脳は、板門店宣言を徹底的に履行して北南関係を新たな高い段階に前進させていくための諸般の問題と実践的な対策を虚心坦懐（たんかい）に深く論議したし、今回の平壤首脳会談が重要な歴史的転機になるものとの認識を同じくし、次のように宣言した。

1. 北と南は、非武装地帯をはじめ対峙（たいじ）地域での軍事的敵対関係の終息を朝鮮半島の全地域での実質的な戦争の危険除去と根本的な敵対関係の解消につなげていくことにした。

①北と南は、今回の平壤首脳会談を契機に締結した「板門店宣言軍事分野履行合意書」を平壤共同宣言の付属合意書として採択し、これを徹底的に順守して誠実に履行し、朝鮮半島を恒久的な平和地帯にするための実践的な措置を積極的に講じていくことにした。

②北と南は、北南軍事共同委員会を速やかに稼働させて軍事分野合意書の履行の実態を点検し、偶発的武力衝突防止のための恒常的な連携と協議を行うことにした。

2. 北と南は、互惠と共利共栄の原則に基づいて交流と協力をさらに増大させ、民族経済を均衡を保って発展させる実質的な対策を講じていくことにした。

①北と南は、今年中に東・西海線鉄道および道路の連結と現代化のための着工式を行うことにした。

②北と南は、条件が整い次第、開城工業地区と金剛山観光事業をまず正常化し、西海経済共同特区および東海観光共同特区を造成する問題を協議していくことにした。

③北と南は、自然生態系保護および復元のための北南環境協力を積極的に推し進めることにし、優先的に現在進行中の山林分野協力の実践的成果のために努力することにした。

④北と南は、伝染性疾病の流入および流行防止のための緊急措置をはじめ防疫および保健医療分野の協力を強化することにした。

3. 北と南は、離散家族・親戚問題を根本的に解決するための人道的協力をさらに強化していくことにした。

①北と南は、金剛山地域の離散家族・親戚常設面会所を早期に開所することにし、このために面会所の施設を速やかに復旧することにした。

②北と南は、赤十字会談を通じて離散家族・親戚のテレビ面会とビデオレター交換問題を優先的に協議、解決していくことにした。

4. 北と南は、和解と団結の雰囲気盛り上げ、わが民族の気概を内外に誇示するために多様な分野の協力と交流を積極的に推し進めることにした。

①北と南は、文化および芸術分野の交流をさらに増進させていくことにし、まず初めに10月中に平壤芸術団のソウル公演を行うことにした。

②北と南は、2020年夏季オリンピック競技大会をはじめとする国際大会に共同で積極的に進出し、32年夏季五輪の北南共同開催の招致に協力することにした。

③北と南は、10・4宣言発表11周年を意義深く記念する行事を有意義に開催し、3・1人民蜂起100周年を北南が共同で記念することにし、そのための実務的方案を協議していくことにした。

5. 北と南は、朝鮮半島を核兵器と核の脅威がない平和の地にしていくべきであり、このために必要な実質的な進展を速やかに遂げなければならないという認識を共にした。

①北側は、東倉里のロケットエンジン試験場とミサイル発射台を関係国の専門家の立ち会いの下、まず永久的に廃棄することにした。

②北側は、米国が6・12朝米共同声明の精神にのっとり相応の措置を取れば、寧辺核施設の永久的廃棄のような追加の措置を引き続き講じていく用意があることを表明した。

③北と南は、朝鮮半島の完全な非核化を推し進めていく過程で共に緊密に協力していくことにした。

6. 金正恩國務委員長は文在寅大統領の招請により、近い時期にソウルを訪問することにした。

朝鮮民主主義人民共和国國務委員会委員長 金正恩

大韓民国大統領 文在寅

2018年9月19日

●朝鮮中央通信論評：「誰が平和を脅かすのか」（9/24）

内外が公認するように、今、朝鮮半島情勢は良好に発展している。しかし、唯一日本だけは安定的で平和な情勢の流れの中で「脅威」を感じるという。

先日、日本は米国のハワイ沖で誰それの「脅威」を口実に弾道ミサイル迎撃実験を強行した。18日には、防衛相が記者会見で「日本が地上配備型迎撃ミサイルシステム『イージス・アショア』で北朝鮮がグアムに発射する弾道ミサイルを迎撃できる」と公言した。

対話と平和が大勢を成している時に、実に鉄面皮な言葉にほかならない。青天のへきれきであるかのように騒ぎ立てる日本の本音は何か。事実上、日本は6月の朝米首脳会談後、誰それの「弾道ミサイル発射」に備えた「自衛隊」の警戒監視水準を緩和し、各地に展開した地対空誘導弾パトリオット（PAC3）部隊を撤収したし、時となく騒ぎ立てていた住民避難訓練も取りやめた。これは、日本が平和の気流を感知しているだけでなく、その恩恵をたっぷり受けており、表向きとは異なり「脅威」説を利用していることを如実に示している。

日本の反動層が恐れるのは、決して誰それの「ミサイル」ではなく、地域情勢緩和の流れの中で防衛力増強、海外膨張、憲法改正のような自分らの政略の実現が阻害されることである。

こんにち、日本の軍国主義野望は公然と「宇宙およびサイバー空間など新しい領域での優位性」を騒ぎ、核兵器に代わる次世代兵器の極超音速巡航ミサイルの開発を追求するなど、既に度を超えて地域と世界の安保バランスを破壊している。

日本がいまだに「制裁・圧力共助」だの、「海上監視拡大」だのと地域情勢を対決に逆戻りさせようと躍起になっているのはまさに、自分らに注がれる国際社会の視線をそらすための狡猾（こうかつ）な術数である。

果たして、誰が平和を脅かすのか。朝鮮半島に流れる平和な雰囲気をあくまでも遮り、地域に緊張状態をつくって漁夫の利を得ようとする日本の反動層こそ、平和脅威勢力、平和破壊勢力である。

日本は、盗っ人たけだけしい自分らの妄動が招く逆効果をはっきりと知り、行動を正すべきである。

●朝鮮の李容浩外相が国連総会で演説（9/29）

朝鮮国務委員会の金正恩委員長は、朝米関係の忌まわしい歴史を終わらせようとする戦略的決断を下し、わが国を訪問したポンペオ米国務長官と2度も会見し、朝鮮半島と世界の平和と安定のために実に重大で寛大な措置を講じた。

平和と発展は現代の共通の志向であり、国連の全ての活動を規定する基本目標である。

こんにち、世界の多くの国が平和と発展のために努力を傾けているが、依然として深刻な挑戦に直面している。

金正恩朝鮮労働党委員長は今年4月、社会主義経済建設に総力を集中することに関する新たな戦略的路線を示した。

金正恩委員長は、朝鮮半島を核兵器も核の脅威もない平和の場につくるための確固たる意志を持って果敢な首脳外交を展開し、北南関係と朝米関係を改善して周辺諸国との友好協力関係を活性化するための重大な突破口を開いたことで、朝鮮半島情勢を劇的に緩和する新しい局面を開いた。

朝鮮半島の平和と安全を強固にする上での要は、去る6月にシンガポールで行われた歴史的な朝米首脳会談で合意、採択した朝米共同声明を徹底して履行することである。

朝米共同声明が円滑に履行されるためには、数十年間積もった朝米間の不信の障壁を壊すべきであり、そのためには何よりも朝米両国が信頼醸成に尽力すべきである。

朝鮮半島の非核化も信頼醸成を優先させることを基本にし、平和体制構築と同時行動の原則で、できることから一つずつ段階的に実現しなければならないというのがわれわれの立場である。しかし、これに対する米国の相応の回答をわれわれは見えていない。

朝米共同声明の履行が膠着状態に直面した原因は、米国が信頼醸成において致命的な強権の方法にしがみついているためである。

最近の北南関係で現れている改善と協力の雰囲気は、信頼醸成がどのような決定的な役割を發揮できるのかをはっきり示している。

北南の首脳は、5カ月足らずの短期間に3回の会談を通じて、北南関係の諸問題を建設的に解決する上で必要な信頼を築き、その結果が現実に現れている。

9月19日に北南の首脳が共同発表した歴史的な「9月平壤共同宣言」が示すように、今年に入って北南間の政治、軍事、人道、スポーツ・文化を含む多くの分野で対話が活性化し、和解と協力の気運が高まった。

米国の政治的反対派は政敵を攻撃するための口実として、わが国を信じられないと中傷しており、われわれが受け入れられない一方的な要求を持ち出すことを政府に脅迫して対話と交渉が順調に進めないよう妨害している。

対話相手に対する不信をあおって強権の方法だけに頼るのは、決して信頼醸成に役に立たないし、逆に相手の不信だけをさらに加増させるだけである。

朝米首脳会談の最も重要な精神の一つは、双方が以前の状態から脱して完全に新しい方式で問題を解決することに合意したことである。

米国はこの重要な時に、自分がシンガポールでの約束を誠実に守ることが究極的には米国の国益にもつながるという先見の明のある判断を下し、朝米関係解決の新しい方式を堅持すべきであり、そのようにするときだけが朝米共同声明の履行の展望を見通すことができるであろう。

朝米共同声明が米国の国内政治の犠牲になるなら、それによって生じる予測不可能な結果の最も大きな犠牲は、まさに米国自身になるであろう。

朝米関係と朝鮮半島問題を解決するのは、本総会のテーマに選定された「全てに必要な国連建設、平和かつ平等で持続的な社会のための世界的な指導力と共同の責任」を実現する上で中核の事項になる。

朝米共同声明を履行するのは朝鮮と米国の共同の責任であると同時に、これには国連の役割もある。

朝鮮半島の緊張状態に対してあれほど「懸念」を表明した国連安全保障理事会が今年に朝鮮半島に到来した貴重な平和の気流に未だ背を向けているのは、決して正常とは言えない。逆に国連安保理は朝米首脳会談と共同声明を歓迎する議長声明の発表を求める一部加盟国の提案も拒否する極めて憂慮すべき態度を取っている。さらには、南朝鮮駐屯「国連軍司令部」は北南間の板門店宣言の履行まで阻む不穏当な動きを見せている。

「国連軍司令部」について言うなら、国連の統制から離れて米国の指揮だけに従う「連合軍司令部」にすぎないが、今も神聖な国連の名を盗用していることが問題である。

国連と、特に国連安保理は憲章に規定されている自己の使命から当然、国際平和と安全に役立つ事態発展を支持、歓迎して鼓舞すべき責任と義務がある。

国連は、本総会のテーマを朝鮮半島問題解決のための実際行動に具現することで、国連安保理は即ち米国であるという汚名を一日も早くすすぐべきである。

●朝鮮中央通信論評（10/2）

「米国が終戦を望まないなら、われわれもそれに恋々としないうらう」

最近、米国のいわゆる朝鮮問題専門家の中で、米国が終戦宣言に応じる代価として北朝鮮から核計画の申告と検証はもちろん、寧辺の核施設廃棄やミサイル施設の廃棄などを受け取らなければならないという極めて荒唐無稽な詭弁が出ている。

終戦は、停戦協定に従って既に半世紀前に解決されるべき問題であり、米国も公約した新しい朝米関係の樹立と朝鮮半島の平和体制樹立のための最も基礎的で優先的な工程である。

実際に、終戦問題は10余年前のブッシュ2世政府の時期に米国が先に提起したことがあり、2007年10月4日に採択された「北南関係の発展と平和・繁栄のための宣言」（金正日総書記と盧武鉉元大統領の共同宣言）と今年4月27日に採択された「朝鮮半島の平和

と繁栄、統一のための板門店宣言」に明記されているもので、われわれよりも米国をはじめ他の当事者がさらに熱意を示した問題である。

朝米双方だけでなく、朝鮮半島の平和を願う東北アジア地域諸国の利害関係に全て合致する終戦は、決して誰かが誰かに与えるプレゼントではなく、特にわれわれの非核化措置と交換する取引の対象ではない。

朝米が6・12朝米共同声明（朝米首脳会談）に従って新しい関係の樹立を志向していく時に、朝米間の交戦関係に終止符を打つのは当然なことであるが、米国が終戦を望まないなら、われわれも敢えてそれに恋々としなないであろう。

寧辺核施設について言うなら、米国をはじめ全世界が認めているように、われわれの核計画の心臓部のような中核施設である。

しかし、われわれは「9月平壤共同宣言」（平壤の北南首脳会談）で、朝米首脳会談の共同声明を誠実に履行する確固たる立場から米国が相応の措置を取るなら、寧辺核施設の永久的廃棄のような追加的措置を引き続き講じていく用意があるということを宣明した。

われわれが朝米首脳会談の共同声明の履行のために実質的かつ重大な措置を引き続き講じている反面、米国は旧態依然として対朝鮮制裁・圧迫の強化を念仏のように唱え、制裁で誰かを屈服させようとしている。

さらに、朝鮮問題を専門に扱うという人たちが60余年前に既に講じるべきであった措置について、今になって値踏みしながら何らかの代価を求める茶番を演じている。

誰であれ、真に朝鮮半島の核問題の解決に関心があるなら、朝鮮半島の核問題発生の歴史的根源とその本質に対する正しい理解を持って問題の解決に臨むのが良いであろう。

●朝鮮中央通信報道：朝中口が3者会談「共同報道文」発表（10/11）

朝鮮外務省代表団団長としてロシアを訪問している朝鮮外務省副相の崔善姫同志は、中国の孔鉉佑外交部副部長兼朝鮮問題特別代表、ロシア連邦外務省のイーゴリ・モルグロフ外務省副相と9日、モスクワで朝中口3者協議を行った。

3者協議では、朝鮮半島の平和と安定のために傾けている共和国の積極的な努力が高く評価され、朝鮮半島情勢の現在の肯定的な推移が持続されるように、それに相応した措置が取られることが重要だという見解の一致を見た。

また、朝鮮半島に恒久的で強固な平和体制を構築し、相互関心事であるすべての問題を合理的に解決するための意思疎通と協力を引き続き強化していくことに合意し、これに関する共同報道文が発表された。（以下、全文）

2018年10月9日、モスクワで朝鮮民主主義人民共和国外務省副相の崔善姫と、ロシア連邦外務省副相のイーゴリ・モルグロフ、中華人民共和国外交部副部長の孔鉉佑が朝鮮半島問題に関する3者協議を行った。

3者は朝鮮半島と関連するすべての問題を平和的で政治外交的な方法で解決しなければならないという意見の一致をみた。

3者は朝鮮半島問題の政治的解決の為の関連国の努力を高く評価し、相互の憂慮を解消し、関係を改善するための朝鮮民主主義人民共和国とアメリカ合衆国、北南朝鮮間の交渉に対して支持を表明した。

3者は朝鮮半島の非核化実現と平和体制樹立の為の意志を再確言した。

3者はこのような過程が、信頼醸成を先行させながら段階的で同時的な方法で前進すべきであり、関連国の相応の措置が伴われるべきだという共通の認識を持った。

3者は朝鮮民主主義人民共和国が、意義ある実践的な非核化措置を取ったことに対して注目しながら、国連安全保障理事会が随時、対朝鮮制裁の調節過程を稼働しなければならない必要性について見解の一致をみた。

3者は単独制裁に反対する共同の立場を再度明らかにした。

また協議では、朝鮮半島に恒久的な平和体制を樹立するために、当該国の間で双務及び多務的協力を強化する必要性が具体的に討議された。3者は対話を引き続き行う事で合意した。

●労働新聞論評（10/20）

「米国は二つの顔でわれわれに対するのが恥ずかしくないのか」

最近、朝鮮問題に関して米国から聞こえてくる言葉が人々の頭を混雑とさせている。一方ではポンペオ米 국무長官の平壤訪問について米国が願う「とても大きな成果」を収めたとの宣伝が騒がしいと思えば、他方では「制裁継続」のような聞きたくない声の人々の耳を痛めている。

米国の選挙遊説の場では、「われわれは北朝鮮と本当に仲がいい」、「過去には彼らと戦争に向かっていたが今はいかなる脅威もなく、実に良い関係を持っている」と明るい笑みを浮かべ、記者会見の場など他の場所では「北朝鮮が何かをするで制裁は続かなければならない」、「まだ北朝鮮に対する制裁解除は考えたことがない」と厳しい表情をしている。

米 국무省も、一方では「平壤訪問が非常に生産的で成功的だった」、「北と議論され事は『大きな前進』だ」、「実務会談を早く開こう」と熱意を見せながらも、他方では「『先非核化、後制裁緩和』が一貫した立場だ」、「南朝鮮当局も南北協力事業を加速させるな」、「東南アジアと欧州諸国も対朝鮮圧迫共助を引き続き強めろ」と脅している。

平壤に来ては懸案やわれわれの憂慮事項に対して肯定してうなずき、米国に帰ると首を横に振り、シンガポール会談の際は北南関係の改善を「積極的に支持、歓迎」と挙げた両手で、「今は北南協力事業を米国承認なしにしてはいけぬ」と遮断しているのだから、啞然とせざるを得ない。

見当がつかない米国の表情と態度は、疑問を生じさせている。いったい、笑う顔とぶっきらぼうな顔のうち、どっちが米国の本当の顔なのか。本当に、朝米関係を改善しようとしているのか、あるいは他の考えが思いついたのか。あるいは、米政府が国内政治的になんらかの強迫症と焦燥感にとらわれて心理的混乱をきたしているのだろうか。

時と場所によって変わる言動と一貫性のない態度について、米紙「ニューヨーク・タイムズ」までも、米政府が混乱したメッセージと空虚の脅迫、混乱を醸成する対朝鮮制裁政策を乱発していると非難している。もちろん、われわれは、米国の11月議会中間選挙を控えているホワイトハウスの「困った事情」と「苦しい立場」を解らないわけではない。

いま、米国の国内政治環境がきわめて複雑であり、このような中でおそらく何かを一つ決断し推し進めることが、どれほど頭の痛い過程になるのか、よく解っている。

トランプの政策を無条件に反対しながら、心にもない「強硬」な言動をする人々が吐き出す毒素によって、米国の政治土壌が「酸性化」しているのは、災難の水準に近いと言うべきである。「だまされてはならない。非核化に対する北朝鮮の真正性を信じられない」と言って不信感を吹き込む人々、「対話とは別に最大限の圧力を維持しなければならない。圧力の水位を緩めるのは大きなミスになるだろう」と言う人々、「本当に想像できないのは、核兵器の開発を北朝鮮に許すことだ」と言って核恐怖症まで煽ろうと躍起になる人々などによって、真実と虚偽が同じ泥沼の中でごちゃ混ぜになっているのが、今日の米国政治の状況である。

前大統領のオバマまでも現状について「わが国の政治は下品で偏狭で恥知らずとなり、政界は虚勢と攻撃、侮辱、嘘の主張、無理に偽装した憤怒がはびこる場となった」と慨嘆している。

反対派が非核化だの、制裁強化などと言うのは、平和のための善良な心からではなく、単にトランプ政権を悩ませ、ホワイトハウスと議会を奪還するために繰り広げる投石にすぎないということは、誰の目にも明白な事実である。それはまた、朝鮮についてよく知らずに、最

も現実的な非核化の方途について特に考えてみたこともない政治門外漢の無理強い以外の何物でもない。

にもかかわらず、米政府は反対派の顔色をうかがい続けなければならないのか。政敵が汚水のように吐き出すデマと風説、雑言に耳を傾けながら、真実のベルの音はいつ聞き、自分の道はどう進むつもりなのだろうか。

問題は、米政府が自国内の強硬派の声についてはこれほど恐れながらも、自分らの信義のない行動と裏表がある態度が、交渉当事者の神経に逆なでするという事実にあまりも鈍感なことである。

偽善と欺まんに慣れ、ごう慢と独善が体質化している米国人は、自らの一方的で二重的な態度は、何でもなく当然なことにみえるだろうが、純粹で明白なことを好み、信義と約束を大事にする朝鮮人には耐え難い侮辱になることを知るべきである。

米国が平壤にきた時にいった言葉とワシントンに戻ってからいった言葉が異なり、心の中の考えと表に出す言葉が違えば、今まで難しく積み上げてきた相互信頼の塔は卵を積み重ねたかのように、とんでもないことになるだろう。

米国が朝米交渉を、世紀を継いで累積した両国の敵対と不信の歴史にピリオドを打ち、新しい信頼関係を構築するためではなく、互いの懐に刃物を忍ばせたまま抱擁する「ラムーレットの接吻」と思っているのかは、知る由もない。

全世界がシンガポールでの両国首脳の対面を「世紀的な対面」、「歴史を変える対面」として歓迎したのは、米国がついにこん棒政策を捨て対話と交渉の道に臨んだと見たからである。

ところが、前ではわれわれの善意の措置に拍手を送り、振り返っては圧迫の棍棒を振り回し続けているのだから、われわれは二つの顔のうち、どの顔を相手にすればいいのか。

平壤で朝米が和気あいあいとした対話をおこなっている時でさえ、米国では「圧力」が問題を解決する主な切り札であり、手にした棍棒を絶対に放してはならないという怒鳴り声が公然と響き渡る有様である。

ある程度の周辺感覚はあるべきである。国際社会からは、「米国がギブ・アンド・テイク式の交渉には関心がなく、唯一朝鮮が米国の圧力に頭を下げることを願っている」、「米国は非核化のみに集中するあまり、はるかに深奥な発展を見られずにいる」という非難が響き渡っている。

鳥も二つの翼で飛んでいるのに、米国は自らの翼はたたみ、朝鮮にだけ飛べと言っている、「与えるものなく受けることだけが好きな米国は世間知らずで、代償なしに施すことだけをやる朝鮮こそ本当の大人だ」と嘲笑している。

国連でも、ロシアは制裁が外交の代わりにならないとして朝鮮に対する圧力に強く反対し、中国も力に依存するのは災難的結果を招くと警鐘を鳴らしている。

しかし米国は、どっちつかずの二重的思考と二重的態度に陥り、目標と手段を混同し大事と小事をわきまえられずにおり、比例感覚とバランス感覚さえ失う状況に至っている。

内輪もめで苦しめられたあげく、今になっては自分らが願う結果が世界の平和と安定なのか、制裁・圧迫そのものか分からなくなっているようだ。

いくら国内政治が複雑で風波が荒っぽいとしても、最低でも最初に定めた目標を失わなければ、思考と行動の一貫性は保たれ、朝米交渉がその軌道に沿って真の目的地に向かって流れるのではないだろうか。

われわれは、米国に善意と雅量までは期待しないが、もらった分だけ与えるべきだという初歩的な取引の原則に即して行動することを求める。

朝米関係の機関車が相互信頼という蒸気を噴き出す時こそ力強く前進するというわれわれの主張と、それは制裁・圧迫というブレーキを引くところにあると考える米国の固執のどちらが正しいかは、あえて聞く必要もないだろう。

朝鮮人は表裏があることと二面性を軽蔑し憎む。米国は二つの顔ではなく、一つの顔でわれわれと対座すべきである。

それは、暗い顔色で失敗した過去を振り返る顔ではなく、やさしい眼差しで成功する未来を眺める顔であろう。

●朝鮮中央通信論評：「平和破壊勢力に与えられるのは完全な孤立だけである」

制裁維持主張で日本は完全に孤立（10/22）

日本が相変わらず悪態をついている。最近、菅（義偉）内閣官房長官をはじめとする日本の政治家は、朝鮮に対する制裁緩和は「時期尚早」だの、「制裁決議」がそのまま維持されるべきだのとでたらめを言った。

朝鮮半島周辺の関係図から排除された哀れな者の卑劣な振る舞いに嘲笑を禁じ得ない。

今、日本は朝鮮半島と地域の平和と安全のための肯定的な対話の場に一度も顔を出せない恥をかいている。

米紙「ワシントン・ポスト」まで、北朝鮮と南朝鮮、米国の協議が行われて東北アジア地域情勢が緊迫して流れているが、日本だけはその流れに加わっていないと嘲弄（ちょうろう）したのだろうか。

問題は、この国の政治家が世界の非難と嘲笑に目を覚ます代わりに、無分別なラップで自らの境遇をさらに困難にしている事実である。

「拉致問題の解決」「瀬取り監視」など、安倍政権が熱を上げて騒ぎ立てる対朝鮮関連の悪態は一様に、現在の対話の雰囲気に対決に逆戻りさせようとする陰険な政治的野望に発したものである。

極右的政策と不正、腐敗などによる自国内の反発意識を鎮める一方、軍国主義海外膨張策動の政治的名分をあくまで維持しようというのが、彼らが狙う真の目的である。

日本の情勢激化策動は、正義・道徳・平和を文明と発展の基準にしている国際社会から強い反感を呼ぶようになっていく。

今、地域をはじめ国際社会は、われわれの主導的な努力によってもたらされた朝鮮半島の対話の雰囲気を支持、歓迎し、現在の情勢緩和の流れがさらに加速化、拡大し、世界の平和と安全、文明の発展に一日も早く寄与するよう願っている。

まさにこのような時に、「時期尚早」だの正反対のラップを吹いて情勢激化に執拗（しつよう）にしがみ付くのは、人類のこのような念願に対する真っ向からの挑戦にほかならない。安倍政権の行為は、島国の成り上がり者の政治的・道徳的高慢さと平和破壊勢力としての醜態を国際社会に刻印されるだけである。差し出がましい言行が続く限り、日本に与えられるのは完全な孤立だけである。

●米国内でウォームビアの死亡に関連して真実がわい曲

平壤親善病院の院長が憤激

平壤親善病院の院長は、最近、米国内で米大学生ウォームビアの死因に関連して真実をわい曲する主張が出ていることで27日、朝鮮中央通信社記者の質問に次のように答えた。

米大学生ウォームビアは2016年1月、わが国で反朝鮮犯罪行為を働いたことで労働教化中にあつたが、2017年6月に病保釈で釈放され、米国に帰って死亡した。

しかし、去る10月10日、ウォームビアの健康検診と治療に介入したというウォームビアの主治医をはじめとする数人の医師が検診結果「ウォームビアの歯に外部の物理的力が加わって位置が変更され、歯茎の骨が損傷を被った」という結論に至った」として、「ウォームビアが拷問によって死亡した」という内容の「医学的所見」なるものを首都ワシントンにある連邦地裁に提出したという。

そのうえ、米国連大使ヘイリーまで「ウォームビアが拷問によって死亡した所が北朝鮮であり、それは邪悪な行動であった」という妄言を吐いたという。

ウォームビアを直接治療した病院の院長として、米国内でウォームビアの死亡に関連して真実が完全にわい曲されていることに憤激せざるを得ない。

ウォームビア自身も自ら記者会見で自認したように、彼が反朝鮮敵対行為を働いた犯罪者であるが、わが病院では人道的見地から彼が米国に戻る時まで誠意をこめて治療してやった。

われわれがウォームビアを送還する当時、彼の生命指標が完全に正常であった事実はウォームビア送還のためにわが国に来た米国の医師らも認め、彼の健康状態に関するわが病院の医師らの診断結果に見解を同じくするという確認書をわが病院に提出し、その確認書は今もそのまま保存されている。

米紙「USAトゥデー」2017年6月21日付けの記事によると、米シンシナティ大のある脳神経医師はウォームビアに対する医学的検査を通じて骨が折れたり、臓器が損傷されるような肉体的虐待を受けた痕跡がないことが確認されたと述べ、ウォームビアが良好な栄養状態で帰国したことを確認した。

また、米NBC放送が2017年9月27日に報じたところによると、ウォームビアに対する検視を行った米オハイオ州のある検視官も報告書を通じて拷問の証拠を探すためにくまなく調べたがいかなる証拠も発見できなかったし、法医学歯科医らがウォームビアの歯を見た結果、外傷がある証拠はなかったと証言したという。

ウォームビアの死因を巡って米国の一部の医師らが、今の時点になって他のことを言っている目的が何であるかということである。

医師の医学的評価は客観的で正確でなければならず、いかなる利己的目的や政治的利害関係の影響を受けてはならない。

真実を重視する人なら、むしろ釈放される時まで生命指標が正常であったウォームビアがなぜ米国に到着するやいなや、急死したかに対する調査を求めるべきであろう。

わが共和国は、過去も現在も教化人を国際法と国際的基準に準じて待遇している。

●朝鮮人権研究協会スポークスマン談話 (11/4)

ヒューマン・ライツ・ウォッチ (HRW) の「報告書」は卑劣な謀略文書

朝鮮人権研究協会のスポークスマンが去る1日、米国に本部を置くいわゆる人権監視団体という「ヒューマン・ライツ・ウォッチ (HRW)」が朝鮮で女性に対する性暴行が蔓延しているという荒唐無稽な「報告書」なるものを発表したことで4日、それを糾弾する次のような談話を発表した。

われわれを無鉄砲に敵視するのに慣れているHRWのようなえせ人権団体が発表した「報告書」は、祖国と人民に対して罪を犯し、自分を産んで育ててくれた父母と子息までためらわずに捨てて逃走した一握りの人間のくずが自分らの汚らしい命を維持するためにやたらに提供するものをかき集めた天下にまたとない卑劣な謀略文書として、われわれはそれに対して論議する必要さえ感じない。

問題は、このような「報告書」発表劇と時を同じくして反朝鮮御用ラッパー手がわいわい騒ぎ立てていることである。

朝鮮半島で和解と協力の大河が流れ、朝鮮半島と地域の恒久的で強固な平和体制樹立のための努力が傾注されている時に、このような不正常で挑発的な言動が出ていることに対してわが人民はもちろん、世界が驚愕を禁じ得ずにいる。

これは、朝鮮半島の平和と安定を願わない敵対勢力が朝鮮のイメージに泥を塗ろうとする政治的謀略策動の一環であり、朝鮮半島の平和と繁栄の流れを逆転させようとする危険極まりない挑発行為である。

朝鮮人権研究協会は、敵対勢力が繰り広げた反朝鮮「人権」騒動をわが国家に対する重大な政治的挑発行為、わが女性の神聖な尊厳を冒瀆する反人倫的な妄動として断固と排撃し、峻烈に断罪、糾弾する。

わが国では、女性が男性と同等な権利を行使しており、国家活動と社会生活の全ての分野で女性の発展と権利保護増進のための多くの法律的・行政的措置が講じられている。

にもかかわらず、根拠のない虚偽ねつ造資料を流していわゆる「人権」うんぬんを並べ立てているのは、朝鮮の自主権に対する重大な侵害であり、社会主義文明を思う存分享受しているわが人民に対する我慢できない冒とくである。

朝鮮人権研究協会は、今回の「報告書」発表劇がわが国家の自主権と尊厳に対する露骨な侵害になるだけに、「報告書」の作成および発表劇に加担した者とそれに追従している者を明かして朝鮮法に準じて法律的責任を負わせることに関する問題を当該機関に提起した。

「人権擁護」の仮面をかぶって女性の尊厳までめった切りにして反朝鮮謀略騒動に熱を上げている敵対勢力の悪らつな策動によって、せっかくもたらされた朝鮮半島での平和と安定の雰囲気影が差すようになれば、その責任は全的に反朝鮮人権団体とそれをあおり立てている敵対勢力が負うことになるであろう。